

— 始まりのために —

地震の後に大きな事故もやって来た。原子力発電の新しい物語が始まった。日本の全ての人々にとつて未知の出来事であろうかと思う。

火を焚きなさい屋久島に生きた詩人のうただ。人間の歴史は小さな炎との付き合いから始まったらしい。318万年もむかしの夕暮れ時にアフリカと名付けられた大地の上で火を囲んだ人間の姿を想像してみたい。

ある学者の話を引用すると、彼らは火を暖をとったり、調理をするのに使っていたのではなかったらしい。飼っていたという事だ。飼う？現代の感覚をそのまま置き換えるのは難しいが、実用的な道具として存在させていたのではなく、生き物として接した訳だ。他にはない魅力的な生き物、生まれ、死に、感情をもち、人と同じように生きる命として付き合つたといふことだ。

彼らは暗闇の中で火と何を語り合っていたのだろう。

アラスカを舞台に写真を撮つた星野道夫という写真家を存知だろうか。太古から変わらない広大な自然の中にひとり、狩人のように彼は動物と巡り合う機会を求めてアラスカの大地に入る。ライ

フルの変わりにカメラを持ち、鉛でなくレンズで命を捕らえる。獲物、動物が神の使いとして、やつて来ると語られる様に実には生きると死ぬ、そして食べると食べられるがシンブルに現れる、精霊と人が共に生きる世界。互いに尊重し合い、厳しい自然に身をゆだねる世界。美しい時間軸だと思う。

撮影のキャンプの夜、彼は火を起す。数十キロ、数百キロ四方にも及ぶ暗闇の中で、星野が火の明かりを浴びながら行む写真がある。深く鎮まつた大自然の闇の中の小さな小さなひとつの炎と人間の写真だ。この一枚の写真が人が人として正しい時間を生きる姿のような気がした。

わたしは娘と宮城県南端の丸森町という山里に住んでいた。そこでの暮らしは生活の中にエネルギーの元の姿を垣間見れる暮らしだった。娘は幼い頃に母親に受け入れられず、その母親も社会と折り合いをつけて生きる事ができなかつた。街から離れたどおり着いたのがそこだった。

ボタンで水がお湯になるのでなく、生きていた木が燃やされて、その熱が水に伝わりお湯になる世界。口の中に入れる食べ物と言われるもの達が生きていた命だと感じられる世界。この世界が誤りを正してくれる気がしたし、それを信じた。

結果、宮城県で暮らしを築いた。

3.12、夕方、福島第一原子力発電所、爆発のニュースをラジオで聞いた友人が玄関を開けた。彼は出来るだけ遠くに早く離れる様にと告げ、駆け

ていった。わたしと娘は燃料の少ない車に両手に持てる程の荷物を持ち、家をあとにした。娘は車の中で何度となく泣いた。モンスターが背後から襲いかかってくる様に怯えていた。高速道路のトンネルを抜けて、モンスターの話をした。

街中を飾る電球のひとつを明るくするエネルギーと、小屋で水を温める薪のエネルギーと同じものだと。一晚の街の明かりの為に使うエネルギーを薪によつてまかなうとしたらどれ程の薪が必要かと。その明かりにどれ程の命が詰まっているだろうか。

娘にどんな種が植えられたのかは解らない。大人の意図をよそに、芽を出さだろう。ただ、彼女達が我々の知らない未来を歩くのだ。子どもたちの心だけはしつかりと見守りたい。

だからマッチを擦つてみる。火が灯されている間に夢をみる童話があるように、何かを届けてくれるかもしれない。本当に大切なものを。

だからマッチを擦つてみる。そして火を育てる。静かな夜に、暗闇の中で語ることなく、その命のひとつの現れをながめるために。

マッチを擦つて思う。小さな炎と核分裂の力にどれ程、救われてここに居るかを。